

ろうと必然的に「○○ちゃんのおバチャン」と呼ばれるのに、こちらでは「○○のお母さん」と呼んでくれるので、これはかなり高ポイントな要素だ。おバチャン文化が幅をきかせている関西ではそれが当たり前でも、半分北海道人になった私には、もう「おバチャン」と呼ばれるのには抵抗感アリアリだ。

そうそう、子供たちが保育園や学校に行くようになって私がすごく良いなと思ったのは、お互いの事を男女問わずファーストネームを敬称なしで呼ぶこと。余程親しいか、余程険悪な間柄でしかそういう言い方はしないと思っていたので、子供同士だけでなく、先生や近所の方々も

そうだし、お母さんたちも子供のお友達に対して「○○！」と呼んでいたりする。とても素敵な習慣だと思った。お互いの距離が近くて心地が良い。

地域性というのは面白いなと思う。拳

げていくとキリがない。別の場所に住んでみると色々見える。逆に、今だからこ前に住んでいた場所の良いところがようやく見えてきたりするものだ。十年、二十年経てば、もっと足寄化しているかもしれない将来の自分が興味深い。

風とナイフ

ありがとう牧場

吉川友二

バブル経済で、就職活動も華やいでいた時代のこと。私は大学を卒業した。しかし、大学院へ行くべきか、農業をやるべきか、未だに決めかねていた。

その春休みのお話。大学の後輩がリーダーで計画を立て、彼の社会人の山仲間と三人で、日高の山を登らないかと誘われた。

大学時代は冬山を中心に、年間百日以上は山で生活していた。そのほとんどは、雪原をスキーで跋涉するといふもので、技術的には難しい山登りはなかった。しかし、今回の山行は、頂上事前に、雪の壁があり、アイスクライミングの要素も一部ある。緊張していたせいか、出発の朝、寮で目を覚ますとかなりの熱がある。

社会人の方も一緒なので、山行の日程をすぐにずらす

わけにはいかない。その日は林道を歩いて、山小屋に泊まるので、そこで、体調を見て山へ行くかの判断をすることにする。

函館を出発する。苫小牧のフェリー乗り場の近くを走っているのだろうか。スピードを出した方が眠くならないからと、車線を変更し、次々と他の車を追い越していく。後輩の車はスパイクタイヤをはいている音がする。ペーパードライバーの私は、今時スパイクタイヤを履いているなんてめずらしいな、スパイクタイヤの方が乾いた路面では滑りやすいのではないか、などと考えている。

沢に沿って山の中へ長くどこまでも伸びている林道。スキーに滑り止めのシールを履いて歩いていく。林道の脇に山小屋がある。三角屋根のバンガローのような小さく簡素な山小屋だ。ストーブが置かれた土間と、それを囲む板の間がある。薪は入り口に少し積んである。ストーブに薪を入れて火をつける。山小屋の床板の上に銀マットを敷いて、シュラフの中にもぐり込む。

その夜、夢を見た。自分が壇上に立っている。学会の発表をしているようだ。一生懸命しゃべろうとするのだが、何をしゃべっているのか分からない。ただ、あせっている、発表の終了時刻を知らせる鐘がチーンと鳴る。朝、熱を計ってみると、昨日までの熱がうそのように、すっかり熱が下がっている。頂を目指して出発する。林

道から小灌木の生い茂る屋根に取り付く。高度を稼ぐに連れて、樹林がなくなり、真っ白な世界になる。

取り付きの屋根から、日高の稜線に丁度出たところに、首から吊るす紐のついたナイフが、置いてある。置いたばかりのように見えて、もしかすると誰か取りに来るかもしれないと、回収しないでそのままにしておく。

稜線を歩き、雪洞を掘るのによさそうな、雪の吹き溜まりを探す。雪洞を掘って、雪の中で寝る。

翌日はピークアタック。頂上手前の崖は少し緊張したら、次第に低灌木が生える生の世界に下りてくる。先頭を歩く後輩の足跡に、足を置くと、そこから雪面に亀裂が走る。

気がつくと、雪の壁に向かう形で立っている。つま先のアイゼンがしつかり、雪に刺さっている。雪庇の崩落だ。バランスを崩さずに、足からすとんと下に落ちたらしい。雪庇と共に谷底に落ちていたら…。

下山したその足で、斜里で農業をしている先輩を訪ねることにする。帯広の駅まで送ってもらって、友と別れたのだろうか。雪庇から落ちて、釧路駅に着くまでの記憶がない。釧路駅の構内で寝ようと思っていると、夜になって追い出される。二階建ての古いアパートの階段の下で夜露をしのいで寝る。

三月の終わり。斜里の町の駅から、大学の先輩の農場を目指して歩き出す。蘭越から農場を移転してきたばかりの先輩。函館から一度、蘭越にあった農場も訪ねたところがある。新しい農場は斜里岳の麓、標高四百メートルのところにある。

ザックを背負って一人歩いている。斜里岳を仰ぎ、下には海が広がっている。風が強い。時々、強い風にあおられる。海からの風は、むしろ歩くのを後押ししてくれる。一面雪の中に、日差しに照らされたアスファルトの道の雪だけ融けて続いている。それにしても、なんという、この開放感だろうか。

今から、十八年前の話。山の中で暮らしたい。自然の中で暮らしたいと、自給自足の農業から始める決意をする。十年の放浪生活で、酪農の世界に導かれていった。二〇〇〇年六月に、足寄に縁があつて定住して酪農を始めた。

今年で九年目になる。日々の仕事の繰り返しに疲れたときに、その風の感触を、ふと、ありありと感じる。この方向で正しいのだという思いが心に満ちてくる。

その同じ時、大学時代に共に山へ登った敬愛する友は、単独で、日高山脈を全山縦走して、襟裳の海を目指していた。旅へ山へと、長年連れ添ったナイフを、この山行で失くしてしまったと後から彼に聞いた。友の喜ぶ顔を

見ることが出来なかった。こんな悲しみもあるのだな、と思った。

風の肌触りから、記憶を手繰り寄せて、この原稿を書いた夕暮れ。私の牧場から日高山脈が赤く、暗く空に浮かんでいた。自分があの時に登った山の頂はどれなのだろうか。ふと、中学生の時に見たスターウォーズの始まりの言葉が頭に浮かぶ。「遠い昔、銀河系の遙か彼方で、偉大な冒険が始まった」。あの遠く、大きな山の中で、芥子粒にも見えない小さな人間の、誰も知らない物語が今日も生まれているのだろうか。ナイフへの思いは、これからの人生のお話の続きに取っておくことにしよう。

そしてこの生まれ
たばかりの小さな物
語がビッグバンのよ
うに宇宙に広がって
いく。



ありがとう牧場 足寄町植坂